医学館の学問形成（一）

医学館成立前後

町泉寿郎

日本医史学雑誌第四十五巻第三号　平成十年九月
平成十一年九月二十日発行　平成十年十一月十六日受理

緒言

幕府医官・多紀玉池（一六九五―一七六六）が、神田佐久間町の天文台跡地に江戸の医師たちの教育養成機関たる躋寿館を創設したのは、明和二（一七六五）年のことである。寛政三（一七九一）年に躋寿館は官立化して医学館として改組され、以後、明治維新まで存続した。前後、約百年にわたって、江戸後期の折衷・考証医学の一大中心地として連綿と学統を形成してゆくのである。

従来、医学館については言及が少なくない。夙に富士川游に「江戸の儒家に井上金峨ありて、創めて折衷の学を唱え、訓詁を漢・唐に取捨し、義理を宋・明に撰択し、穏当を採羅し、以て先聖の遺旨を闡発することを務とし、山本北山、吉田篁墩、太田錦城（ママ）、亀田鵬斎等嗣いで起こりて考証学派を立てしより、その学風はまた延いて我が医学に影響し」（『日本医学史』、明治三七年初版）たという概説がある。今なお資料的価値と未到の詳細さを誇る森潤三郎の『多紀氏の事蹟』（昭和八年）と、それを補遺した波多野賢一（『中外医事新報』一一九七）と藤波剛一（『日本医史学雑誌』一二八八）の研究がある。近年、中国医学古典の書誌学的研究という視点から、医学館の考証医家の業績を最も精力的に再評価している

小曽戸洋には、医学館刊行物に関する言及の中で、多紀茝庭・伊沢柏軒・渋江抽斎・小島宝素・森枳園・喜多村栲窓らに関する言及がある（『中国医学古典と日本』、塙書房、一九九六年）。また資料に関しては、『医談』（自六六号至八二号）に連載された「幕府医学館秘要録」が寛政期の医学館関係文書を多く収めており有益である。安政六年以降の文書を集成した『医学館帳』（内閣文庫所蔵）は、先に倉沢剛によって『幕末教育史の研究』（吉川弘文館、一九九四年）に使用された。川瀬一馬が旧安田文庫所蔵の医学館における講書の「出席留」をもとに「御目見医師講義聴聞躋寿館出席留」（『日本書誌学の研究』所収、昭和一八年）を発表しており、天保十四年以降の講書の日付・講師・聴講者などがわかる。松木明知が渋江抽斎の医学館出講記録である『医学館講書一件記録』（抽斎の孫、渋江乙女所蔵）にもとずいて『渋江抽斎の研究』（岩波ブックセンター信山社、一九八五年）を著している。

以上のごとく、まず資料においては、医学館関連資料の現存状況は既知のかぎりでは天保・弘化の交以降の幕末期のものが比較的豊富である。次いで寛政度の官立化の時期のものが残る。（これに対して文化・文政期のものは極端に少ない。）こうした資料の伝存状況の偏りに起因して、研究の進捗状況にも幕末偏重の傾向がみられ、江戸後期の医学思潮に重要な意義を有したはずの寛政期の医学館成立期のことは十分に明らかにされてきたとは言い難い憾みが残る。かつ寛政期の幕府の教学政策全体の中で医学館官立化の問題をとらえるという視点も欠けていたように思われる。

そこで本稿においては右の問題意識に立ち、可能なかぎり新資料の発掘に努力しつつ、以下のごとくに三報に分かって行論した。

第一報　医学館成立前後

一　学校官立化をめぐって

二　躋寿館創設前後の時代背景

三　躋寿館官立化の意義

四　昌平黌と医学館
五　医学館の学統の形成について
第二報　寛政の改革期の官医たちの動向
――『よしの冊子』の記事から――
（細目）改革初期のころの風聞、天明八年の黜陟と療治実績の申告、陪臣医・町医の評判、寛政元年の官医への通達、躋寿館博奕騒動、半井氏の凋落、多紀藍渓の権力の伸張、医学館創設、二の丸製薬所
第三報　幕末考証学の位相
一　幕末江戸の都市文化
二　思弁と考証
三　学問の位相

一報においては、医学館官立化の意義を、幕政改革者松平定信によって現実社会の趨勢と既存の政治機構との間に生ずる矛盾を解決すべく断行された、大規模かつ抜本的な幕制改革の一部として位置づけたうえで、特に同時期に林大学頭の私塾を改組して官立化した昌平黌と医学館を対照せしめ、両官学の性格の相違を明瞭化した。すなわち一般の幕臣を対象とし、幕藩体制擁護の教学思想たる朱子学を官許の正学として掲げる昌平黌が、幕府の官僚機構養成機関として機能してゆくのに対し、医療技術者養成機関たる医学館では朱子学一尊の教学体制に掣肘されない折衷・考証へと展開する独自の学風を形成していったことを明らかにした。

二報では、従来全く医史学研究に使用されてこなかった『よしの冊子』という資料を活用して、医学館成立期の官医たちの動向を詳細にたどることにつとめた。該資料は江戸城中の風聞の書留という体裁ではあるが、幕政改革断行者松平定信に随時提出され、政策と相即の関係にあった資料であり、かつ公文書からは窺い得ない、移動・黜陟の背景や各

官医の性格や内面の動きまで知り得る点が貴重である。

三報は、官立学校たる医学館では幕府の権威と庇護を背景に学統が形成された一方で、市野迷庵や狩谷棭斎らのごとき市井の学者との交渉も深かったことが知られており、単に幕府の学制に注目しただけではこの学統・学風を評価するに不十分であることに配慮し、江戸後期から幕末にかけて極盛を迎えた江戸の都市文化との接点をめぐって考察した。

一、学校官立化をめぐって

幕政に儒学が強固に結びつくのは、五代将軍綱吉の時からであるというのが定説である。文化年間に書物奉行近藤正斎が編纂した『右文故事』や『好書故事』を繙けば、綱吉が諸大名や幕臣に倦むことを知らず行った経書講釈と、寵臣柳沢吉保邸での儒者荻生徂徠や細井広沢らの御前講釈・御前問答の記事は枚挙に遑がない。さしずめ「文運漸く開く」と評価すべきところだが、好学の将軍の厚恩に感謝すべきはずの荻生徂徠は、綱吉の学問奨励策を次のように批判している。

御家の儒者は、林家の流儀多き処に、林家の学問、道春春斎立おき候家法やふれ、三四十年以来、ことの外衰微仕候。（中略）春斎時分、学寮に付居候書生二十人余も有之候。外より通ひ候弟子三四十人も可有之候。指南のいたし候かた、五科十等を立候。五科とは経学科、読書科、詩科、文科、和学科にて候。（中略）講釈の仕方、道春春斎も一月に二三度ほとつゝは講釈致し候へとも、専ら弟子とも指南のために、故事出処をたしかに考、説々の同異を詮義致、学者の益に成候ために致し候故、弁もことの外かたく、白人の耳に入かね候ゆへ、世上にて林家は代々講釈下手と申儀に候。嘉右衛門流は、四書近思録小学と立候分にて、易本義までの学問にて、広く学候を雑学と申嫌ひ候。師より講釈を習ひ候へは、不学にても事済義に候。講釈のいたし方、白人の耳に入候を第一にいたし、林家の流儀とはうらはら違ひたる儀にて候。然る処林家の学問、嘉右衛門流のことくに成行候起は、御先々前御代（筆者

注・綱吉）講釈盛になり、白人まで講釈致させ候ことになり、且又昌平坂に講釈所別に出来、書生にても無之ものに講釈きかせ候事になりゆき候ゆへ、覚へす嘉右衛門流の如くになり候事に候。

（「日本儒林叢書」第三巻所収『学寮了簡書』）

林羅山・鵞峯の時代までは、家塾において密接な師弟間で、有効な方式に基く広範囲かつ高度な学問が行われていたが、綱吉以来、書生でもない一般むけの講釈を昌平坂の講釈所で行うようになったため、儒者は啓蒙家に堕して山崎闇斎流の狭隘で益のない学問になってしまった、という。徂徠は民衆を学校で教育することは全く不要だと考えた。

聖人の道は普く天下の人に教を施候といふ事を心得誤り、仏家に是あり候談議の筋のやうに存候故にて候。聖人の道に、普く天下の人に教を施すといふは、孝悌礼譲を教る事にて候。孝悌礼譲の義は、講釈に不及、孝悌礼譲とさへいへは、愚民までも合点まいる義にて候。扨其教を天下に施候仕形は、奉行役人其筋を心得罷在、仕置の上にて其筋を以て申し付くる、直に教に罷成候事にて候。

人民への孝悌礼譲等の人倫訓導は、人民の直接的支配者が令達によって行うべきことがらであり、官立学校の負うべき役割ではないとする。では学校の担うべき役割とは何か。

学校は畢竟官人を仕立候所にて候。延喜已後今日に至り候ては、諸役皆世官に相成候故、学校にては専ら儒者を仕立、国家の御用に立候義を主意と仕候事にて候。

国家の役に立つ官人を養成することこそ学校の使命であると明言していることに注目したい。しかし徂徠も言うごとく、幕府役人は世官を基本としている。幕藩体制安定につれて個人の能力や努力が職官に反映しなくなっている時に、向学心は生じようがない。結局、徂徠はこの正徳四年の『学寮了簡書』の時点では、官学を儒者養成機関とするに止まった。儒者に政治的発言権のあったこの時期にはこれもある程度の有効性を持つと考えられたのであろう。

七代家継が正徳六年に八歳で夭折し、綱吉より続いた側近政治が終わり、譜代門閥に迎えられた吉宗の享保時代が始

まる。実用的学問を好んだ吉宗は当初、徂徠にさほど注意しなかったが、『六諭衍義』和訳に実力を示して以来、その最晩年に到って政治上の諮問に与かる機会を得た。こうして提出された『政談』[1]（岩波・日本思想大系36所収）では、先の『学寮了簡書』より一歩進めた学校教育論を展開している。

稽古事ハ、公役ノ稽古ニハ人々勧マヌ物也。（中略）手前ノ信仰ナル師ナレバ、附届ニ物ヲ入テモ、稽古ヲスル心ナレバ稽古スル也。

昌平坂・高倉屋敷ハ場所悪キ也。唯儒者ヲ江戸中所々ニ配リ置、人々勝手次第ニ参ル様ニ有度事也。然バ教ル人モ学ブ人モ勝手ヨキ事也。学問ハ公儀ノ勤トハ違テ、畢竟内証事ナレバ、勝手ヨクアラネバ成ヌ事也。

儒者共ノ宅ニ上ヨリ稽古所ヲ御立下サレ、屋舗ヲモ弘ク下サレ、弟子共多ク、書写ノ御用モ可勤程ナラバ、弟子共ニ御扶持ニテモ下シ置レ、当時与力ナドヘ被仰付ル御写物御用ヲ、右ノ者ニ仰付ラレヽバ、学者ノ取扱事故、文字モ正ク、校合モ善ルベシ。

御旗本ノ学文アルヲ、其向寄ノ儒者ドモヨリ、若年寄・御番頭ヘ申サスベシ。（中略）扨学文アル人ヲ撰テ御役人ニ仰付ラルヽ様ニアラバ、学文ハ流行ルベキ事也。唯無学文トモ、知行高ト家筋ニテ御役人ニハナル事ト人々覚居ル事ナル故、気ノ詰ル事ハ為ヌ道理也。

日記ヲ真字ニテ認ルトキハ、第一真ノ文章ハ短カクテ事スミ、其上真字ハ目角付者ナル故、何程大分ノ日記ニテモ即時ニ繰ルヽ得アリ。公事判断ニモ律ノ詞ヲ不用故、罪ノ名ヲ不附ニ因テ、判断ノ筋ニモ間違アルト見ヘタリ。去バ如右スル事ハ、人ニ学文ヲサスベキ為計リニハ非ズ。大ニ益アル事也。兎角学文ナクテハ公辺ニ手支ル事有様ニ立置時ハ、人ハ我慢ナル者ニテ、学文ヲバ上ノ御催促ナクトモ可為事也。

日本国中ハ相持ナル道理ニテ、諸大名ノ家ニテ学文流行レバ、学者ノ身上片付アルニヨリテ、ヨキ学者モ多ク出来、御家ノ儒者モ自然ト学文ヲ励ムベキ事ナレバ、十万石以上ノ大名ニハ、其在所ニ学校ノ様ナル物ヲ立サセ度事也。

ここで徂徠が論じているのは、世襲制が固定化している幕臣を自発的に学問に向かわせるためには、いかなる策を講ずべきかという問題である。儒者の仕事口を増やすための方策と、公用日記の漢文化や律に基いた裁判用語の使用など、言葉で教説することの無力さをしばしば語っている徂徠ならではの具体的対策である。官学を儒者育成にとどまらず、幕府役人の養成を目的とする機関とした上でその具体策を明示している。「御用に立つ」官人の養成機関という学校の基本性質が、すでに前提となって議論がなされているのである。

元禄元年に綱吉が忍岡の聖廟に将軍として参詣し、同三年には幕府によって神田に聖堂が遷され、同四年から仰高門内東舎で一般庶民を対象とした講釈（東舎経講）が始まった。綱吉の文治政治は、門閥譜代から権力を奪取した独裁者の、聖帝に自らを擬した理想主義的、啓蒙的なものであった。続く正徳期にもこうした啓蒙を目的とした経書講釈（庁堂講釈）は継承され、一方で将軍側近に昇った新井白石が林家と対立したため、徂徠も言う林家の衰微が始まった。将軍と側近の独裁的傾向の強かった五代・六代・七代に替って、譜代大名層の支持によって登場した八代吉宗の政治は、基本的に現実主義的なものであり、幕府行政機構の改革においても、幕初以来の慣習が固定化した「先例・先格」を全否定するよりは、「足高の制」などによって見られるごとく実際の運用面での法的整備によって解決しようとした。足高の制は、下級の者を登用した時に、在任期間に限り所定禄高にまで足して支給する制度であり、「封建領主的収入より官僚的収入の比重」[2]が大になる傾向を生じる政策であった。現実には町方や勘定方など特定の行政部門においてのみ、足高の制が有効に機能して人材登用が行われたにすぎなかったが、この時期こうした官僚機構創出への模索が行われていたことは、官立学校に官人養成機能を担わせるという徂徠の建言とも深く連関していると思われる。

しかし結局のところ吉宗は教育制度においては、八代洲河岸高倉屋敷での庶民向けの講釈、和訳『六諭衍義』の手習テキストの奨励、商業都市大坂の懐徳堂の準官立化など、儒教倫理の普及啓蒙をより一層推進することに意を用いたと評価できるのであり、ついに徂徠の幕府役人を育成する教育機関の必要性をめぐる提言は、吉宗のもとでは実現されず

に終った。

次いで享保期に一端確立した幕府の官僚機構が、宝暦期以降、急速に負の側面を露呈しはじめる。この状況を象徴するのが田沼意次の賄賂政治である。「それまで幕府の政治あるいは全国支配の基準となってきた先例・先格というものが崩れてきたことと賄賂とが密接に結びついている」（佐々木潤之介「宝暦――天明期の政治情勢」『大系日本史叢書・政治史II』二五〇頁、山川出版社、一九六九年）という事態なのである。

この田沼政治を否定し、幕府機構の抜本的改革をめざした松平定信のもとで、官僚養成機関としての学校建設という懸案は、新たな局面を迎え、徂徠の提言とは違ったかたちではあるが、検討・立案・実施されることになるのである。寛政三年に官医多紀氏の私的な学塾であった躋寿館が医学館として官立化され、後れて寛政九年に林家の私塾が官立化されて昌平坂学問所となったのがそれである。

二、躋寿館創設前後の時代背景

多紀玉池が躋寿館を創設した明和二（一七六五）年の世相は、幕政では田沼意次の側用人拝命（明和四年）まで今少しという時期で、田沼時代の到来を目前にしていた。年貢徴収を財政基盤とした江戸幕藩体制が、中期以降の流地と農民層の分解という農村の変質にともなって、危機的状況をむかえるなかで、全国的規模に伸張してきた商品貨幣経済への積極的介入（株仲間への冥加金課税など）に、財政上の活路を見出そうとした田沼政治は、夙に辻善之助が「民権の発達」「思想の自由」などと評価したように、文化・思想面での注目すべき状況を現出したが、政治・社会体制の根本的建て直しという面では無力であった。

百家争鳴的活況の一端を示せば、尊皇討幕を尖鋭的にとなえた竹内式部の宝暦事件や山県大弐の明和事件が相次いでおこっている。国学ではすでに宝暦十三年に賀茂真淵と本居宣長が松坂での一夜の会見をとげ、晩年を迎えた真淵は県

居を営んで隠栖し、主著の整理に腐心しており、宣長は『紫文要領』『石上私淑言』をすでに脱稿し、『古事記伝』に着手する時期である。

漢詩文では、荻生徂徠の没後も長く影響力を維持し続けた蘐園派が、相次ぐ遺老の死によって漸く衰え、かわって反徂徠・反古文辞の論調が抬頭してくる。明和元年は、先に没した山井崑崙とともに校勘学に先駆的業績を残した根本武夷が六十二歳で没し、すでに『読学則』（宝暦六年）で徂徠学批判を展開した井上金峨が、朱・王・伊・物の淵源特質を論じ、その長所の折衷に独自の主張を見出そうとした『経義折衷』を刊行している。寛政三博士の一人、柴野栗山の特色ある辞書『雑字類編』の脱稿もこの年である。明和二年には大坂で片山北海が漢詩社・混沌社を結んで、蘐園派の擬古詩からの脱却の端緒をつくった。後年医学館や考証医家と深い関係を結ぶ大田錦城と市野迷庵がこの年に生まれている。

文芸では、平賀源内の『風流志道軒伝』（宝暦十三年）のモデルとなり、市川海老蔵と並ぶ江戸名物と目された講釈師志道軒が没した（明和二年）。散文では上方において都賀庭鐘の『英草紙』に続く、中国白話小説を翻案した前期読本の諸作があらわれ、江戸では洒落本の時代をむかえる。韻文では川柳の流行が『誹風柳多留初編』（明和二年七月）の刊行によって幕を開けた。

江戸中期を彩った人と文物が終焉にむかい江戸後期の中心になるものが萌芽しはじめた時期、また上方から江戸への文化東漸の転換の時期でもある。

医学の分野に目を転ずれば、享保から宝暦までは香川修庵・山脇東洋・吉益東洞・望月三英らに代表される、古学派（古義学派と徂徠学派）の影響下に成立した古方派、乃至は初期折衷派の医家と、稲生若水・丹羽正伯・野呂元丈・松岡恕庵ら本草家の業績が目につく。このうち、山脇東洋と望月三英[3]が古医書の翻刻に意欲的であったことは、後に医学館で発達した文献研究の前駆的現象と見ることができる。

明和元年には、多紀桂山と並称される学医山田図南が、朝鮮通信使との筆談『桑韓筆語』を上梓した。図南は徂徠門下の麟嶼の孫であるが、後に折衷学者山本北山に入門して、東洞批判（『天命弁』）、徂徠批判（『権量撥乱』）を展開し、古文辞墨守派を落胆させることになる（天明四年刊・佐久間熊水著『討作詩志彀』）。

明和三年には奥平中津藩医前野良沢が、青木昆陽にオランダ語の手ほどきを受けて蘭学興隆の発端を作った。

儒学と医学の世界はこの時期とそれにつづく時期に、ほぼ徂徠学と古方派への批判と修正が大多数を占めたと見られるが、その一方で中国に範をとらずに西洋の学問に就こうとする者が出はじめていた時期ということができよう。

三、躋寿館官立化の意義

躋寿館建設の翌明和三年の六月二十日、多紀玉池は七十二歳で没し、嗣子藍渓が家督し、躋寿館の督事をも相続した。幕府からは当初補助地一つを賜わっただけで、林家が家塾経営のために禄高一五〇〇石のほかに九五人扶持を支給されて、寄宿生を置いていたのに対し、躋寿館経営ははるかに多紀氏の自己負担にゆだねられていた。平安時代以来の名家丹波氏の末裔とはいえ、傍系に属するにすぎず、禄高も二〇〇俵にすぎない多紀氏が、何故、医学校を建設することになったのか、その理由は不明である。だが躋寿館経営が多紀氏を経済的に圧迫することは必至であった。明和九年二月二十九日の火災に躋寿館が類焼し、翌々年の安永二年五月に、多紀氏は私財を以て再建した。この時、経済的負担に堪えかねた多紀氏は、幕府に躋寿館維持費用を、官医および江戸中の陪臣医・町医から年々挙出させるように願い出た。幕府財政に負担をかけず、民間の資金を運用して政策を実施しようという、田沼時代らしいやり方である。[4] しかし官医にしろ陪臣医・町医にしろ、躋寿館に出席すべき義務もなく、出席することによって生ずる利点も明らかでない場合に、醵金がうまくゆくはずはなかった。[5]

さらにこの措置に強く抗議したのが、典薬頭を世襲し、官医中最高位にあった半井大和守成高と今大路兵部大輔正福

である（『官医家譜』）。両氏は自分の弟子たちにも躋寿館に修学させまいとさえして多紀氏を妨害した。この結果、両氏は幕府より「不埒なる心底なり」と譴責されている。両典薬頭としては多紀氏の潜越を座視することができなかったのであろうが、こののち寛政三年の医学館成立までの間、多紀氏の興隆と典薬頭家の凋落は幕府医官制度を大きく転換させてゆくことになるのである。寛政二年に幕府から半井氏に対して秘蔵の古鈔本『医心方』を提出するようにとの下命があった。これは一般に多紀藍渓・桂山父子が松平定信に進言したことと考えられている。[6] 半井氏はこれを拒絶して、天明八年の京都の火災で焼失したと言い逃れたため、今大路氏とともに差控を命ぜられた。時を同じくして、多紀氏の躋寿館は官立の医学館として改組された。

藤波剛一の『武鑑』調査によれば、江戸幕府の官医制度の確立は正徳期以降のことである。[7] 続いて享保元年十月二十四日には、典薬頭家に「旧き名家といひ、門徒もあまたなれば、小普請の中にて、医学治療もさりぬべきもの、沈淪してしられざるを選挙すべし」（『有徳院殿実記』）と命ぜられた。半井・今大路両氏は、官医を統率する権限を持ち、御目見・番入等の人事権を掌握しており、家格だけではなく、実権をも有したのである。それが『医心方』一件をめぐる処罰と医学館成立により、典薬頭家が有した権能が医学館へと移行することとなった。夙に森潤三郎が指摘するように、典薬頭家が有した医権は、儒学における林家が儒官任免に関して有した権威に准えられる。[8] 松平定信の改革は、これらの旧来の権威を剝奪し、かわって官立学校を設け、登用試験を実施することにより、幕臣への学問奨励・風儀改善をはかり、幕臣を組織化し直すことをめざしていたといえよう。官医に対しては、寛政元年の通達[9]によって明らかになるごとく、医業研鑽の程度や患者数の多寡という基準にしたがって、現状に見合う官医の身分・禄高の黜陟を断行することをうたっている。そうした官医の組織の大幅な改革が行われたのち、改善された組織が永続的に有効に機能するための機関として、医学館が設置されることとなったのである。

すでに橋本昭彦の『江戸幕府試験制度史の研究』（風間書房、一九九三年）によって実証されたように、昌平坂学問所で

の考試は、中国の科挙制度のごとき、登第者を政治の中枢にまで登用するようなものを想定しておらず、幕臣各層での成績優秀者を先格に従って番入りさせ、各層の奮気を促すといった意味合のものだった。しかしながらこれによって固定的身分社会の枠組の中である程度の能力主義をうちだし、且つ登用に際して各部署での個人の権力集中を抑制するということは期待できたのである。

ほぼ同時併行して、というよりもむしろ、林羅山以来の伝統を誇る林家の私塾が、大学頭林錦峯の抵抗もあって、錦峯の死後、養嗣となった述斎林衡の下でようやく官立昌平黌が成立するのに対し、松平定信の親任厚い新興勢力である多紀氏が主宰した躋寿館は、先んじて寛政三年に官立化を成し遂げ、官医機構の再組織化のための機関として歩み出したのである。

四、昌平黌と医学館

両官立学校は、如上のごとく共通の使命を帯びて発足したが、また相違点もあった。

昌平黌の場合、庶民をも視野に入れた啓蒙的な講義である仰高門日講や、諸藩からの留学生の居た書生寮での講義もあったが、なんといっても中心は幕臣を対象とした、北楼講釈・会読や稽古所講釈・会読や御座敷講釈であった。このことは歴代の御儒者が日並に記した昌平黌日記を見ても歴然とする事実である。幕臣は入寮の際にごく初歩的な素読を試みられて入寮が許可され、在寮中は右の講釈・輪講や詩文会によって学力を養い、学問吟味という試験の結果、優秀な成績を修めた者は幕吏として番入りすることが約束されていた。学業成績と就職を結びつけることにより、世襲によって停滞した幕臣の向学心を高め、役人の人材の質的向上をはかったのである。寄宿生や通学生は、上級の旗本の子弟で寄合に入っている者や非役の小普請の子弟たちであった。藩士を収容した書生寮はこれとやや性格を異にする。御儒者による講釈は月に六回と、寄宿寮に比してずっと少ない。諸藩においてすでに学力優等を認められ、将来藩に任用さ

れることを目途しての江戸留学という性格が強かったのである。寄宿寮の者よりも年齢も学力も高い者が多かった。また幕府の側からすれば、幕府が教学として公認した朱子学を諸藩にまで伝播させるという意図もあった。

右のごとく昌平黌は、幕吏撰抜機関であり、藩士留学機関であって、中国の典籍を教材として使用はするけれども、漢籍の研究を使命とする機関ではなく、幕藩政治機構の実務を担当する人員の、養成・撰抜機関の性格が強いのである。

一方、医学館も、寛政三年の官立化当初、登用予備要員である寄合・小普請の官医に加えて、陪臣医・町医をも修学対象として想定したが、官医が予想外に多数出席したため、天保十四年の制度改革によって陪臣医・町医のための講書が開講されるまでは、官医のみを対象とすることになった。またどの程度継続的に実施されたかは不明だが、寛政度以降、医学考試も行われており、[10]基本的に官医の番医、奥医への任用のための撰抜機関の性格を持ったことは間違いない。

しかし、かく登用者選抜機関としての共通の性格を持ちながらも、一般の幕府官僚養成のための昌平黌と専門的医療技術者を養成するための医学館では、課業の方針に相違があった。発足時の通達（寛政三年九月二十四日）に、「流儀見識等、一同は無之事に候間、入学之外、出席之面々は、只聞見を広め」云々とあって、『小学』「四書」など闇斎学的傾向の濃厚な、限られた経書のみを講じた昌平黌の課業とは異質であったことがわかるのである。ここでは幕末期まで時代の下った資料ではあるが、両官学の学規を比較することにより、学風の相異を検討したい。まず『書生寮学規』[11]を掲げる。

覚

一、四書は朱注、周易は伝義、書経は蔡伝、詩経は朱伝、小学は本注相用可申、右へ引合せ候末疏類、夫々拝借被仰付候事。

一、三礼三伝は注疏を主とし、礼記は陳注を見合可申、其外見合候書籍、拝借相成候事。

一、皇朝歴史類取調度向は、六国史・大日本史等拝借被仰付候事。

一、漢土歴史之儀、正史編年銘々見込有之、取調度分、拝借相成候事。

一、右経史研究之儀は本課に有之、日々取調候分、急度起止簿に相認、試業之節御儒者へ差出可申事。
一、詩文稽古之儀、兼学と相心得、唐宋以来之集、其外清人之撰著にても取調度向は拝借相成候事。
一、皇朝御制度并漢土歴代制度筋、取調度向は、政書類拝借被仰付候得共、是亦経史研磨之間合等に拝見可致候事。
一、伝奇小説類、本朝仮名物語等、銘々数寄好にて本課之余事、自分限りに一覧いたし候儀に候得ば、拝借可被仰付候得共、右を経史修業同様日課之廉へ相立候儀は、不相成候事。
一、叢書等之内、古来よりの雑談同様之儀相載候書類は、是又課談には不相立候事。（以下略）

一方、『医庠諸生局学規』[12]は次のごとくである。

一、素問、霊枢、本草経及難経ハ古医経ナレバ最モ尊奉シテ研究スベキコト勿論ナリ。傷寒論、金匱要略ハ古聖人遺方ノ存スル処ニシテ、儒家ノ六経アリ論孟アルガ如クナレバ、殊ニ熟読玩味置カザルベキナリ。然レドモ病情万変ナレバ、加フルニ博渉ノ功ヲ以テスルニアラザレバ、恐クハ妙用ヲ悉スニ足ラズ。サレバ旁ラ晋隋唐ヨリ宋元明清ノ書ニ至ルマデソノ源流ニ泝洄シ、ソノ世ニ随テ医風ノ推移スル所ヲ考ガヘ、我智識ヲ長ゼハ、孫真人所謂於医道無所滞礙ノ地位ニ到ルベシ。ソノ書ヲ読ノ例、大抵其世次ノ先後ニ随ヲ可トス。
一、人各性ノ近キ所アリ。故ニソノ器ノ大小ヲ論ゼス学問ニ長ズルモノアリ治療ニ長ズルモノアリテ両全ナルコト能ハズト雖モ、畢竟学問ヲ以テ治術ノ基本トスルナレバ、膚浅ノ学ヲ以テイカデカ活人ノ手段ヲ得ベケンヤ。故ニ大医タラント欲スルモノ習業両ツナガラ勉励セザルベカラズ。
一、経史百家ノ書、医方ニ渉ラザルニ似テ医方ニ於テ益ヲ得ルコト勝テ計フベカラザルモノアリ。サレバ余力ヲ以テコレ等ノ書ニ及ブコト、コレ亦少シクモ怠ルベカラズ。
一、経ノ中ニ就テ最モ早ク講明スベキモノハ周易、尚書ノ洪範、左伝ノ鄭子産秦医和ガ晋侯ノ病ヲ論ジ昭公元年タルガ如キ、各処ニ散見ス。ソノ他周官ノ医職マタ表出シテ講ズベキナリ。子書ニテハ呂覧、淮南子、論衡ノ類ナリ。史

ハ史記、前・後漢、三国志、晋書等最モ読マズンバアルベカラス。儒家典籍ノ疑義、作文ノ法等、能ソノ教授ノ人ニ就テ礼ヲ尽シ指南ヲ受ベキナリ。

一、王太僕ノ素問ニ於ル、呂・楊二家ノ難経ニ於ル、成聊摂ノ傷寒論ニ於ル、均シク古義ノ存スル所トス。学者宜シク精究熟研シテコレヲ以テ医学ノ根抵ト為スベキナリ。更ニ補フニ諸家ノ説ヲ以テセバ備ハラザルコトナカルベシ。然ドモ徒ニ厖雑粉淆ニ渉ラバ初学ニ在テハ望洋ノ歎無キコト能ハズ。コヽヲ以テ先祖考、素問・霊枢ニ識アリ、傷寒論・金匱要略ニ輯義アリ、難経ニ疏証アリ。先伯父マタ紹識、述義ノ著アリ。古医経ノ閫奥ヲ窺ント欲スル者、新奇ノ説ニ迷ヒ、ソノ歩ヲ失フコト勿レ。

一、近日官命ヲ奉シテ刊印セシ医心方ノ一書ハ古医経ノ羽翼トモ称スベキモノナレバ、コノ書ニ拠リテ古義ヲ発明セバ益ヲ得ルコト莫大ナルベシ。

右は文久三年一月に、多紀柳沚の嗣子・棠辺が撰び、版刻して冊子としたものであり、全二四条からなり、臨床上の注意事項や勉励の心構え等の条項も含まれているが、学問に関する条のみを引いた。

『書生寮学規』では「四書」（朱熹の集注・章句）、『周易』（程頤伝・朱熹本義）、『書経』（朱熹の門人蔡沈の集伝）、『詩経』（朱熹の集伝）、『小学』、という朱子学流の解釈に基く経書と、日本と中国の史書までを本課とし、詩文制作、政書に基く制度研究、小説類や叢書の渉猟などは本課の研鑽を妨げぬ範囲内で許容されている。それに対して『医庠諸生局学規』では、古経方に精通することを基盤とし、古義の闡明を重視した上で、博渉を力説している。漢代起原の医経に視野を限定せず、清代に至る歴代の医書や、子・史にまで目を配ることが、医学の歴史的変遷と源流への溯上を考える上で必須であるとする。博渉に力及ばぬ初学者には、右のごとき方法の成果である多紀桂山・茝庭の注釈書を手引きとすべく教えている。

徂徠学の成立によって学問の分化が促進される中、道徳的修養と政治的実践が未分のままに統一されている朱子学を、

幕藩政治社会体制の維持のための教学として採用したことによって出発した江戸時代の儒学は、大きく変貌し動揺し始めた。それが宝暦期前後の、百家争鳴的な儒学界の状況であり、それはまた朱子学的世界観では律し切れなくなった、商品貨幣経済の浸蝕による封建社会の変質とも即応していた。

寛政期にめざされたものは、儒学を再度、道徳的実践の学として定立することにより、動揺をきたし始めた社会秩序の再確立にあったといってよい。昌平黌に期待された、幕府官吏養成機関への改組は、その中核的具体策であった。幕吏さらには全国の藩吏の正統的学問として、上記のごとき朱子学系の典籍が採用され、幕末までそれは基本的には変わることがなかった。しかしこの結果、『書生寮学規』にみるごとく、昌平黌の学問が幅のせまい、萎縮したものになったことも否めない。これに対して医学館では、何ら党派的見地に左右されず、万変する病態に対応できるだけの幅広い学問を身につけるという命題のもとで、学問は博大化し且つ精密化した。しかも臨床と学問との関係においても、医学館での学問は、臨床的有用性によって古典を恣意的に変改する傾向を持った古方派の超克から出発しているだけに、文献学が安易に臨床に隷従することはなかった。

社会的機能が全く異なるのであるから、当然といえば当然なのであるが、昌平黌よりも医学館の方が文献研究の方法論として見るとき、今日に近いものをもっていたことは明白なのである。

五、医学館の学統の形成について

明和二（一七六五）年より慶応年間まで、前後百年におよぶ医学館の学統を単一視することはできない。館主多紀氏に即して言えば、初代玉池と二代藍渓の時代と、四代柳沂とその弟茝庭の時代とでは明らかに学風に差があり、藍渓の嗣で柳沂・茝庭の父である三代桂山がその移行期にあたると見ることができよう。よって以下、考察をすすめるにあたり、前後四期に分けることにしたい。まずは寛政三年までの躋寿館時代である。次に桂山の死の文化七（一八一〇）年まで。

以後、天保度に茚庭が次第に昇進して医学館の実権を握る時期（天保十年頃）を境に、三期と四期に分ける。

次に躋寿館もしくは医学館に関わりを持った医家の撰定の問題である。医学館刊行物には必ず校勘・影写の作業にあたった人物を、巻頭序末に列記しているので、同書出版の時点での医学館の教諭・講書などの主要人員を知ることができる。躋寿館時代のことは、講書の次第を一枚刷にした安永三年の「躋寿館講次」[13]や天明期の百日教育の頃の様子を伝える茚庭の『時還読我書』がある。医学館の主要な医者の儒者との影響関係をふまえつつ、その学風を辿ってゆきたい。

①（濫觴期）躋寿館時代

前述の「躋寿館講次」は未紹介の資料であるから、まず掲げておこう。

躋寿館講次

午牌	八十一難経	筑水藤俊丈
一六		
未牌	痢洄集	松洲霊木衆
午牌	霊枢経	博沢服安
二七		
未牌	取経挨穴	北山藤井義
午牌	素問経	素斎高養安
三八		
未牌	金匱要略	虢州秋山宜脩

午牌　格致余論　西山林立節
四九
未牌　宋板傷寒論　桃庵桃井寅
附傷寒古訓
五十午牌　本艸綱目　賀台藤舜調
右講例循旧
安永甲午春
一六申牌　論語集解　北海入江貞
四九申牌　春秋左伝　桐原弥昭
五十申牌　詩経　四溟岡正懋
本館講業医書之外旧不及
他書今旁講関係斯道者

次に『時還読我書』（『杏林叢書』所収）では多紀茝庭が桂山の弟山崎菁園からの伝聞として、初期の躋寿館の課業の様子を次のように述べている。天明四年に開設された、いわゆる「百日教育」のころの状況である。

天明四年甲辰ヨリ百日教育ノ挙始レリ。其法格ハ二月十五日ヨリ後百日ノ間、有志ノ生徒ヲシテ学塾ニ入テ勤学セシメ、外来ノ生徒モ日々講受ヲ聴コトヲ得セシム。（中略）其勤惰ニ従テ講席班列等ノ黜陟アリ。入学ノ時ハ親族ヨリ券書ヲ出シ総理ヨリ規約ヲ示諭ス。講例ハ旧式ニ遵ヒ六部書ヲ定トシ先教諭ハ素問ヲ講ジ玉ヒ、山田図南・桃井陶庵（ママ）ハ傷寒論ヲ講シ（図南ノ門人笠原雲仙・中林俊庵代講ス、陶庵ハ田沼侯ノ医ナリ）、目黒道琢ハ内経等（驪恕公是ナリ、其門人曽根惟中・西村玄周代講ス）、服部玄広ハ霊枢（清水公ノ医ナリ）、加藤俊丈ハ難経（俊丈ハ市医ナリ）、田村元雄・

太田長元（ママ）ハ本草（曽昌啓等代講ス）、小坂元祐・岡田道民ハ経絡ヲ講ゼリ（道民ハ井伊侯ノ医）、儒家ニハ金峩先生、吉田篁墩、亀田鵬斎、継デ錦城先生皆講経アリ。大抵百日中一部ノ書ヲ卒業セリ。日ニ三人ヅツ、講授セリ。内外ノ諸生総テ二三百人ニ及ベリ。皆互ニ研究シテ弁難セシトゾ。更ニ一百日中施薬アリテ診治ノ法ヲ習シメ、医案会アリ（百日中二十会、大抵一月七会）、疑問会アリ（一月中三会）、薬品会アリ（百日中一次）。

まず安永三年の講次についてみると、講じられる書籍の内容は、『難経』『霊枢』『素問』の古経と『傷寒論』『金匱要略』の古方に加えて、本草書として明・李時珍の『本草綱目』があり、経穴に関する講義があり、金・元の医学理論書として元・王履の『溯洄集』と元・朱丹渓の『格致余論』が配されている。『溯洄集』と『格致余論』はともに明代の叢書『東垣十書』にも収められて、十七世紀以前より我が国でもよく読まれて各種の和刻本が出されている。古経方、本草、針灸、後世方を網羅し、医学教育のテキストとして偏奇のないものと評せよう。しかしもう少し詳しく見ると、『傷寒論』は古方派・吉益東洞の門人である桃井桃庵の『傷寒論古訓』によっている。本草書も後には李時珍の見解によって古本草を改めたとして、『本草綱目』は『神農本草経』にとってかわられる。つまり古方・後世方の併存をここに指摘することができる。講師陣に関しては、伝未詳の人物が多く、『時還読我書』の記載によって僅かに陪臣医や町医であることが判る。幕府官医は一人もいない。既記の桃井桃庵のほか、秋山虢州（名宜修、通称玄瑞）、加藤筑水（名俊丈、字万卿）が若干の著書によって名を知られる。「加台藤舜調」は『文会録』にみえる福山舜調であろうか。

注目すべきは、医書講釈以外に、儒者による儒書講釈が、この時期の躋寿館ですでに始まっていたことである。「本館の講業は、医書の外、旧（も）と他書に及ばず。今旁ら斯道に関係するものを講ず」という但し書きから推すに、儒書講釈の開始は安永三年のことであったかもしれない。テキストでは『論語』でも『論語集注』（朱熹注）でもなく、何晏の『論語集解』を掲げているところが興味深い。周知のごとく、この後寛政年間に吉田篁墩は善良なテキストを得べく、『論語』諸本を校勘して『論語集解考異』を撰した。漢代すでに斉・魯・古の三論が鼎立し、それぞれ系統を異にする諸本が今

日にまで伝えられていると考えられる時に、直ちに諸本の異同を校勘して原『論語』に溯ることは不可能である。むしろ現存最古の魏・何晏の『集解』の校定に止めておくべきだという見識である。『論語集解』の講師は荻生徂徠門の入江南溟の養嗣北海である。すでにこの年、六十四歳で、講師中の高齢者である。入江北海に篁墩ほどの目録学の見識があったか否かは不明だが、流布した朱注に拠らないところに明確な主張が読みとれる。

『詩経』の講師岡部四溟は、井上金峨の門人だが、むしろ若い頃親交のあった大田南畝・大森華山・菊池衡岳との共著『牛門四友集』（明和五年刊）や、『四溟陳人詩集』（明和九年刊）によって、護園末流の漢詩人群の一人として知られる。安永三年の講次からは以上のごとく、医書講釈における古方・後世方並存と、開始されたばかりの儒書講釈では徂徠学派の流れを汲みつつも、金峨門の岡部四溟のごとく既に折衷学への傾斜の始まっていることが看取される。

次に天明四年以降（多紀氏の経済的逼迫によりわずか四回のみに終ったとも言う）の、百日教育に移ろう。医書は『素問』『霊枢』『難経』『傷寒論』『金匱要略』『本草経(?)』が講釈のテキストとして撰ばれている。『時還読我書』を「躋寿館講次」と資料価値において同列に扱うことはできないが、莅庭の言を信ずるとすれば、すでに安永三年より十年にして、金元医学の要素は低下し、『本草綱目』も改められた可能性がある。講師陣をみれば、前述の山田図南、本草家として著名な田村元雄（元長の誤まりか）や太田澄元（伊沢蘭軒の本草の師）といった官医の名が目をひく。山田図南は儒学を山本北山に学び、医経を加藤俊丈に学んでいることが知られている。[14] 今大路家の門人で、松平定信に仕え、考証医学の創始と目される目黒道琢の存在は、松平定信のもと医学館が創設され今大路氏が譴責されることを思えば、注目に価する。儒者は金峨とその門人たちである。大田錦城は天明四年に東上し、天明六年以降多紀藍渓・桂山父子を頼って躋寿館に寄寓していた。

講釈だけでなく、医案会、疑問会、薬品会などの実習・検討会が課せられていたことも注目される。殊に医案、疑問は、病証に関する治験を各自が漢作文するものであり、医学知識と共に漢作文能力が問われたのである。『よしの冊子』

には医案を提出する様に求められた官医たちが漢作文に難渋したという風説がある。[15] 多くの官医が苦手とした漢作文能力を多紀氏が重視し、躋寿館において課業化していたことは、折衷学者の深い関与とともに、医学館における学問の発達に必要な基礎力を培う上で必須であったと思われる。

以上のごとく天明期の百日教育から、躋寿館に金峩系の折衷学の学統が着実に根を下していることと、儒書に及ぶ広汎な古典の読解や漢作文を重視した教育方針が窺える。

②寛政度の官立化より文化年間まで

寛政三年の官立化によって、医学館は学統の上で根本的な変質をすることはなかったが、人事面での大幅な刷新は不可避であったため、短期的にみればこの時期の学風は、天明期の考証学への萌芽の如き鮮明な性格付けに欠ける。官医中の学術優秀者を糾合して講師としたことと、実権は多紀父子が掌握していたことは次報に後述したい。「幕府医学館秘要録」所収の文書を見てゆくと、寛政十一年を境に文書から藍渓の名が消えて桂山の名があらわれる。七月二十六日に六十八歳の藍渓は致仕を許され、桂山に家督と医学館督事が継承されて、多紀氏の医学館による官医支配の世襲化の方向が定まりつつあった。

講師陣は寛政四年当初、多紀桂山・杉浦玄徳・山本宗英・福井楓亭・吉田快庵・田村元長・山崎宗運であったものが、この後も西国からの登用が続き、同九年に痘科の池田京水、同十年に荻野元凱、同十一年に本草の小野蘭山が寄合に挙げられて医学館で講書している。江戸の官医も杉浦玄徳が罷免ののち、寛政十年に千田玄知、杉本樗園が講師となり同時に日々の素読指南のために土岐寛庵、森雲南、吉田栄庵、山崎宗徳、吉田察玄、遊佐九伯、喜多村安正、千賀道栄、吉田自琢、福井益之進が御用を仰せつかった。官医の養成機関であり、かつ官医の任用機関でもある官立学校としての組織が、ほぼこの頃までに一応の整備をみたといえる。素読指南の面々は学問出精により御目見を許されて間もない若

い官医たちが多い。例えば幕末期、木活字印刷設備を持った学訓堂で『医方類聚』等、多数の出版を行った喜多村栲窓の父槐園安正の名を見出す。学医喜多村氏の端緒をここに見ることができよう。

しかし官医中に優秀な人材が育ちつつある一方で、先に見た百日教育の時期に考証医学成立の牽引力となった目黒道琢や亀田鵬斎・大田錦城・吉田篁墩らは、身分上、官立化以後の医学館から締め出されることとなった。藍渓は寛政八年に、創設直後の混雑も去ったとして、陪臣医・町医の出席許可を願い出たが、許されなかった[16]。諸分野の専門家を擁した医学館は、充実した講師陣容とも評し得るが、他方では以前のように陪臣医・町医から古医書に通じた人材を広く吸収することができなくなった為に、医学館における文献学的学風の占有度が低下した感は否めない。

さらに松平定信の厚遇のもとで権力を手中にした多紀父子が、藍渓の享和元年七月十一日の死去に続いて、十月には桂山が奥医師から寄合医師に免黜された。権力基盤たる医学館まで喪失したわけではないが、多紀氏にとって一大危機である。桂山失脚の背景にいかなる権力闘争があったか、今詳かにしないが、これによって医学館内においても桂山の権勢が弱体化したことは予想される。だが、享和以降、文化七年までの桂山の晩年十年間をみるとき、失意の晩年というよりも、むしろその中で得た閑暇に『素問識』（文化三）、『霊枢識』（文化五）、『医賸』（文化六）、『傷寒論輯義』（享和一）、『金匱要略輯義』（文化三）、『扁鵲倉公伝彙考』（文化七）、『櫟窓類鈔』（文化六）などの主要著作を脱稿し、また詩文集『櫟蔭艸堂文集』の題跋を検すれば倦むことなく医書の影写、校勘に精励していることがわかる。桂山晩年の医学館での影響力が低下した時期に、桂山によって考証医学は緒に就いたと見なしうる。この方向は桂山の二人の男柳沂と莅庭によって継承発展されてゆく。二人の儒学の師は桂山が終生親交した大田錦城であった。これに桂山の末弟で同じく錦城門下で、徴されて昌平黌の助教となった貞吉（名元忠、字季恕）も加えて、寛政期より文化期までの間、多紀氏と最も密接な関係にあった儒者は大田錦城である。寛政十年に没した吉田篁墩は、桂山と終始善かったが、柳沂・莅庭とは直接の交渉がないようである。

③桂山の死より天保期まで

文化七年十二月二日に五十七歳で桂山が急逝した時、嗣子柳沂はいまだ二十一歳で、早速家督し医学館督事をも継承したが、若年でこの重責を担うことは困難であったため、桂山と学医の名を斉しくした杉本樗園が提挙司（世話役の筆頭）となって実務を掌握することとなった。樗園の学統は、松宮柳囿（伝未詳）に儒を学んだという（佐藤一斎撰碑銘）が、むしろ山本北山に従学したという『歴代尚薬略伝』の記事を尊重したい。二歳年少の佐藤一斎とは若い頃から親交があり、後に一斎の嗣子立軒が樗園の孫女を娶ったので、姻戚ともなった（『五月雨草紙』）。また葉山氏の女を養女として多紀柳沂に嫁がせているので、多紀本家とも姻戚関係をもっていた。

樗園と一斎が若年時の放蕩から、寛政異学の禁に際して、更生して各々の学に精励するようになったという逸話がある。

両人にて毎夜吉原の堤へ往き、往来人を執へて無法に投げしに、不意を打れて、誰も手向ふ程の者あらざりしかば、打興て何よりの娯楽と為したりしが、寛政御改革の折に際会し、此両人は絶世の才子なりしかば、忽ち翻然と身の行状を改め、放蕩無頼の事を止めて、絶道読書作文に身を入れたりし、其比林大学頭衡（快烈先生と諡す）猶ほ廃世子の身にて、向島能登侯の邸にありて、専ら文学を好まれしかば、此両人も同じ学友たり、後何れも天下の名人となられし。

（中央公論社・新燕石十種第三巻所収、『五月雨草紙』、二七頁）

佐藤一斎の年譜[17]に徴すると、寛政五年に林家七代錦峯門に入り、間もなく錦峯が没して松平能登守乗蘊の子述斎が林家を継いだため、一斎も述斎門となったとあり、右の逸話は時期的にほぼ承認できる。また一斎はこの頃から林家同門の松崎慊堂、市野迷庵、清水赤城らとも交わったというが、樗園も慊堂と親しかった[18]。つまり樗園の学問は、はじめ折衷学的方向を指向したが、異学の禁のために異学者との交渉は疎くなり、林述斎、松崎慊堂、佐藤一斎ら林家一門中、文献学にも理解を示した者との交わりを通して形成されたといえる。詩文の才能に恵まれていたことを伝える記事も

あり[19]、恐らく文学の才において多紀桂山と拮抗するものを持っていたと考えられる。しかし桂山から茝庭へ継承される医学館の考証的学風の流れから言えばやや異質的、傍系的である。たとえば文化十三年に医学館で木活字翻印した、吉田意安家襲蔵の元版『聖済総録』は、佚存書刊行の意義は今日もなお色褪せないが、後の厳密な影写校勘による翻刻とは違い、林述斎が編纂した『佚存叢書』（木活字）の方に性格が近く、後の喜多村栲窓の学訓堂聚珍版の『医方類聚』などにつながる出版と評価できると思われる。

その一方で、『聖済総録』校合の実務担当者として名を列ねている若い官医中に、「小島質」（号宝素）の名が見出ることは、多紀桂山の蒔いた考証医学の種子が、医学館に学ぶ官医子弟の中に着実に後継者を生じ、継承されつつあることを証している。ただしその継承の舞台は、桂山の死後、文化末年から文政期には、医学館から例えば狩谷棭斎の求古楼や伊沢蘭軒の酌源堂に遷っていた。

棭斎ははじめ細井平洲の女婿泉豊洲に儒学を学んでいる。社会的実践に重きを置く折衷派である。しかし棭斎は、この学風の影響を受けることは少なく、吉田篁墩・藤貞幹の著書や屋代弘賢の誘掖によって、実証的な学問を樹立した。棭斎が、弘賢等の該博な知識に基く網羅的な研究の影響をうけつつも、それを凌駕したところは厳密な資料批判にあった。書誌と校勘の重視という点において、棭斎は篁墩の学問を継承している。

桂山および柳沢・茝庭が親交を持った大田錦城と、吉田篁墩とでは、同じ井上金峨に発する学統に属し、互いに学識を認め合いつつも、この校勘に関する態度においては早くから袂を別かっていた。医学館の考証医学は、棭斎とその知友との交流を通じて、古書の鑑別や校勘を重視し、厳密な資料批判の上に構築された学問へと脱皮してゆくのである。

この古書の鑑別会は「求古楼展観」の名でよく知られている。今日残されている展観会の目録と解題は文化十二年五月七日から翌十三年の閏八月までに行われた計十一回分である（『求古楼展観書目』）。棭斎とその知友が各自所蔵の古版・古鈔本を、棭斎宅に持ち寄って書誌学的に検討する会である。参加者を、梅谷文夫の考証[20]に従って文化十二年時の年齢・

身分と共に列記すれば次のごとくである。曲直瀬正隆（官医、45）、山本宗英（官医、45）、小島宝素（官医、19）、小山吉人（清川靄墩、市医、24）、市野迷庵（商賈・51）、屋代弘賢（幕臣、55）、河合白水（姫路藩家老、55）、伊沢蘭軒（福山藩医、39）、塩田屯（福山藩医）、増島蘭園（儒官・47）、多紀茝庭（官医子弟、21）、余語古庵（官医）、河野良以（官医、49）、曽根某、湯川柳南（官医、45）、松崎慊堂（掛川藩儒、35）、近藤正斎（幕臣、45）、狩谷棭斎（商賈、41）、太田全斎（福山藩儒、57）、小島成斎（福山藩士、20）。官医と福山藩士の多さが目をひく。また屋代、近藤、太田の旧山本北山門人が会していることも注目される。蔵書の富贍や知識の該博を特長とする北山門下と共通の基盤から出発しつつも、その厖大な資料を吟味する、文献操作の科学性において棭斎とその後継者が新たな段階へ進んだことが想定されよう。曲直瀬ら壮年の官医たちは、文献学者というよりも、むしろ貴重書所蔵者である。棭斎と伊沢蘭軒（泉豊洲門の同門）を師匠格とし、多紀、小島らの若い官医や清川ら蘭軒門下の俊秀が次代の学統を形成するのである。いわゆる儒者は松崎慊堂以外にはいない。また優良な資料の集中的使用は書誌学の発達に不可欠の条件だが、この展観会によって、江戸の蔵書家間の情報交換や資料貸借が促進された意義は大きいと思われる。

医学館での『聖済総録』に続く校刻は、文政十二年の『千金翼方』である。この時はすでに小島宝素は、舟橋経中、野間任夫とならんで、事実上、事業の中心者に成長している。

このころには、伊沢蘭軒門下に「蘭門五哲」と称された幕末考証医学の掉尾を飾る者たちもほぼ成年に達し、頭角を顕わしはじめていた。

④天保末期以降

「蘭門五哲」とは渋江抽斎（一八〇五―一八五八）、森枳園（一八〇七―一八八五）、山田椿庭（一八〇八―一八八一）、清川靄墩（一七九二―一八五九）、岡西玄亭（?―一八五六）である。医者としての出発の遅かった清川が寛政四年生まれで最

年長だが、他はほぼ文化年間に生まれている。これに蘭軒の男榛軒（一八〇四―一八五二）・柏軒（一八一〇―一八六三）を加えれば、蘭軒の学統をついだ者がほぼおさえられる。彼らは蘭軒に医書を学ぶ傍ら、儒書、詩文に関しては次のような師承関係を持っていた。渋江抽斎は市野迷庵と狩谷棭斎に学んでいる（海保漁村撰「渋江道純墓碣銘」）。森枳園は狩谷棭斎に学んでいる。[21] 山田椿庭は山本北山門下の朝川善庵に学んでいる（森枳園撰「椿庭山田先生墓碣」）。善庵は実父片山兼山以来の家学としての荀子研究を『荀子述』としてまとめる際に、棭斎から宋・元版を校訂のために貸り出しており（『日本芸林叢書』所収「棭斎華牋」）、同門の大田錦城などに比べれば校勘の意義を認めていた。清川靄墩は、大槻磐渓に添削を受けた詩稿が現存（国会図書館・鶚軒文庫）しているほか、既記のように棭斎の求古楼展観にも参加していた。

しかしこれらの人物は陪臣医や町医であるため、官医のみを聴講者とし講師とする医学館の中で彼らを任用することは、現状では不可能であった。多紀茝庭は自分と嗜好を同じうする彼らを医学館に登用し、考証医学の旗幟を闡明にしたかったものと思われる。丁度この天保期は世代交替の時期でもあった。天保七年は将軍家斉在位末年で、長く医学館提挙司を勤めた杉本樗園と痘科の池田京水が没した。同年に茝庭は奥医師、法眼に進み（宝素も同年法眼）、同十一年には法印に昇り、官医中の実力者となった。同十三年八月には御目見医師二十七名に対して医学館講釈への出席が許可され、[22] 翌十四年十月十五日には御目見を賜わっていない陪臣医・町医に対しても同様に聴講が許可された。[22] さらに陪臣医・町医に講書をも担当させた。時まさに水野忠邦の天保の改革の時期に当っており、寛政度の制度改革が必ずしも十分に機能していないことへの反省がなされ、昌平黌においては試験制度改革が行われ、[23] 綱紀粛正がめざされていた。すでにこの以前に、辻元冬嶺（一七七七―一八五七、播磨林田藩医、山本北山門下、天保八年御目見）のように、官医でない者が講書する事例も生じてはいたが、この時の制度改革により陪臣医・町医中の優秀な人材が数多く医学館に流入する契機となり、幕末の流動的な社会情勢に伴なう先格に囚われない人材起用の気運とも相俟って、安政頃にはむしろこれらの人々が医学館の考証医学を担う中心的な存在となるのである。この意味で、天保十四年に陪臣医・町医の医学館出席が寛政

三年以来、五十二年ぶりに許可されたことは、画期的なできごとであった。

そしてこの医学館の改組によって、蘭軒、椀斎の旧門人たちは、ほぼ医学館に吸収される。この時期の医学館の学問を主導したのは、茴庭と宝素である。先述の辻元冬嶺も奥医師、法印、医学提挙にまで進んだ学医だが、臨床手腕と、江湖詩社系の大窪詩仏や菊池五山らと親しい漢詩人として知られた人物であり、文献学的には見るべき業績がない。蘭門五哲とほぼ同世代の官医喜多村栲窓（一八〇四―一八七六）は学訓堂聚珍版の刊行者として知られ、学問にも見るべきものがあったが、茴庭・宝素らの主流と合わなかった。栲窓は初め安積艮斎に学び、学識優等を以て医学館において考試授読、教諭と昇進し、奥医師、法眼にまで到ったが、安政四年に医学提挙を辞して江戸郊外大塚に隠居した。彼は洋医が漢医を凌駕する勢いであることに危機感を深め、その漢医不振の理由を漢学（考証学）の弥漫によるものとして茴庭らの考証医学への批判を募らせていったのである。[24]

結局、茴庭、宝素と蘭軒・椀斎門（伊沢榛軒、伊沢柏軒、森枳園、渋江抽斎）、茴庭門（堀川舟庵、佐藤元萇、清川玄策等）、宝素の男春沂・春澳らが医学館の主流を成すのである。中でも渋江抽斎と森枳園は、椀斎から十分に小学（文字学）の知識を吸収した上に、椀斎・宝素へとうけつがれた古書鑑識力をも兼ね備えた。宝素・春沂父子、榛軒・柏軒兄弟が書誌と校勘を専らにし、注釈書の類を殆ど残さなかったのに対し、抽斎・枳園は多方面にわたる著述を残すこととなった。

山田椿庭も多量の読書記などに優れた学識を窺える人物だが、椿庭のそれが『傷寒論』『外台秘要方』などの特定の医書の解釈を目的として、諸注を引きつつ判断をくだし、当該医書の読解のためには非常に有効な書物となっているのに対し、森枳園の『攷注』などは唐以前の古書を渉猟し、古文献全体に広く通暁することを通して、当該医書の解釈を帰納的に導き出すという方針が貫かれており、そこに両考証家の姿勢の違いを看ることができる。やはりここにも枳園が椀斎から学んだことの大きさを思わずにいられない。

幕末の考証医家が到達した学的水準を、枳園の『本草経攷注』（台湾故宮博物院所蔵）自序によって一瞥しておこう。

本草経攷注序

蓋聞秦焚書医家不預焉、則在今日唯本草経一書全然存旧帙、固非如詩書諸経僅得之於壁蔵口授之余、此豈可不謂医林之大幸哉（蓋し聞く、秦の焚書は医家これに預からずと。則ち今日に在りては唯だ本草経の一書、全然として旧帙を存す。固より詩書諸経の僅かにこれを壁蔵口授の余に得るがごときに非ざるなり。これ豈に医林の大幸と謂はざるべけんや。）

この約百年前、古方医香川修庵は『書経』と『素問』『霊枢』とを比較して、「鎮鉏、蟻鼻の缺有りと雖も、鉛刀と日を同じうして語るべからず」（『一本堂薬選』下編「附録」）と言って、儒書を医書と同日に語るべからざる尊いものとした。むしろ枳園はここで『本草経』の完具する医学が、秦火に経書が残缺した儒学よりも、資料の上で恵まれているとする。修庵には初めから医より儒を上位におく価値判断があったのであるが、枳園は中国書籍の伝流に関する知識を踏まえつつ、資料上の条件によって医を儒に対置せしめ、むしろ医を儒に優るとするのである。

つぎに、『本草経』の薬名は、当時の俗称に従っており、『爾雅』『詩経』の呼称と合致しないものがある。且つ後世の失読転訛によって薬名に「緩呼」「急呼」（門冬と髦など）の二種が生じた場合がある。他に古書特有の「顚倒成義」（萹蓄と畜辯など）、「添偏旁」（丘蚓と蚯蚓など）、「省文成義」（泄利腸澼と泄澼など）の例も多い。そこでこの注釈において特筆すべきことは「舎字而取音、舎音而取声、蓋四声元是一声、就声而得字、就字而得義、有義而後有方言、方言亦有緩急顚倒之不同、錯綜攷究而後始可以得其本義（字を舎てて音を取り、音を舎てて声を取る。蓋し四声は元これ一声。声に就いて字を得、字に就いて義を得、義有りて後に方言有り。方言も亦た緩急顚倒の同じからざる有り。錯綜攷究して後に始めて以て其の本義を得べし。）」という方針をとったことである。これによって『説文』『爾雅』の説を補翼し、また『説文』の誤まりを訂正できる場合も多いという。漢代の学問に盲従しない点は、清朝考証学者にも見られぬ見識といえよう。

当然、引用資料の吟味には十全を期した。すべて唐以前の説に限り、宋以後のものは取らなかった。但し唐以前の遺文の存する『太平聖恵方』『太平御覧』（紅葉山文庫所蔵宋版）は例外である。また我が国の平安・鎌倉の古籍にも取るべ

きものがある。

在延喜間深根輔仁撰本草和名、直以我名充彼名、其無国産者則書一唐字、亦皆有所受而言也、承平中源順著和名類聚鈔、多拠輔仁書、而間或引用弁色立成漢語抄二書、至嘉元正和間、梶原性全撰頓医抄万安方二書、其所引用猶是新修本草真本、凡此皆其卓々可尊奉者矣（延喜の間に在りて、深根輔仁、本草和名を撰し、直ちに我が名を以て彼の名に充て、其の国産に無き者は則ち一唐字を書す、亦た皆受くるところ有りて言ふなり。承平中、源順、和名類聚鈔を著して、多く輔仁が書に拠りて間々或は弁色立成・漢語抄の二書を引用す。嘉元・正和間に至り、梶原性全、頓医抄・万安方の二書を撰し、其の引用するところは猶ほこれ新修本草真本なり。凡そ此れ皆其の卓々として尊奉すべきものなり）。

周知のように『和名類聚鈔』には枳園の師狩谷棭斎に『和名類聚鈔箋註』の研究成果があり、『本草和名』は寛政八年に多紀桂山が紅葉山文庫の古写本を底本として校訂、頭注を加えて出版したものであった。枳園の業績は桂山に発し、棭斎に深化した文献学の遺業を十分に踏まえた成果と言えるのである。

枳園は江戸時代の本草研究を総括して次のように言う。

原夫慶長以来以本草為家者、互騁意見徒競新奇、亦唯率以李氏綱目奉為圭臬、其他府志県志所載某物為某之類、往々近似闘草之戯竟不知古本草之為何物（それ慶長以来、本草を以て家を為す者を原ぬるに、互ひに意見を聘して徒らに新奇を競ふも、亦た唯だ率ね李氏綱目を以て奉じて圭臬と為し、其の他府志・県志所載の某物を某と為すの類のみにして、往々にして闘草の戯に近似し、竟に古本草の何物たるかを知らず）。

太田澄元の『本草経解』、鈴木良知の『本草解詁』、岡邨尚謙の『本草古義』はやや見るべき研究であるが、『経解』は国産品を究めて、薬効を論じたものであり、『解詁』は考証に詳しいが、明・清諸家の説を折衷するものに過ぎず、古書に精通して古書を解しているとは言い難い。『古義』は明代の『本草綱目』で『本草経』を校正するという文献学的に問題のある通弊から脱却できていない。結局、古書解読上、資料批判の徹底性において、自らの研究成果に自負を抱いて

いることが読みとれる。

もうひとつ枳園の自負するところは、如上の文献操作上の精到、小学の知識のほかに、壮年期の落魄時に自ら山野を跋渉して体得した、実地の経験である。夙に山脇東洋は不変の人体を出発点とする学問であるゆえに、礼楽制度の歴史的変遷とともに変化する儒学の「道」を究める難しさに比べれば、医学を究めるのは易しいと言って古方派の奮起を促していた（『医則』四）。医学はいかに文献上の考証に傾斜しても、一方で実地に経験し得る植物や人体といった形而下の不変的自然に深くかかわることを止めなかった。この両面を止揚することにより、彼らの考証医学は高度の実証性を獲得したものと考えられるのである。

注

（1）『荻生徂徠』（岩波書店、日本思想大系三六、一九七三年）の辻達也の解題によれば、『政談』の成稿時期は享保十年七月二十八日以後、同十二年七月十七日以前のほぼ二年間と考証され、徂徠が吉宗に初めて謁見を許された十二年四月一日の前後に吉宗に献呈されたものと推定している。

（2）前掲『荻生徂徠』所収、辻達也「『政談』の社会的背景」七六八頁。

（3）望月三英の「古方書」の校訂・出版、および医学校建設意欲を、多紀氏が主導した考証医学の先駆的業績として位置づける、石田秀実の「望月三英の研究㈠㈡」（『漢方の臨床』三二―五・六）は、京都の古方派と三英との差異を論じて有益である。三英の校訂出版はテキストの普及という意義を多く担い、享保期とそれに続く時期に特徴的な啓蒙普及的性格が強く、寛政以降の時期に多紀桂山によって緒に就いた清学の影響をうけた考証医学と同列に扱うことはできない。しかし三英の好書ぶりが、幕末の小島宝素や森枳園にも想起されていたものであったことも忘れるべきでない。

（4）「先達て申達候通、多紀安元学館再建の儀に付寄附物諸医師より可有之段申達候処、今以不相集由に候、先達て御書付之通、諸医師より寄附物可有之様可申達旨田沼主殿頭殿被仰聞候間相違候（公儀御触書・旧政府御達留）」（『中外医事新報』一一九七号、昭和八年七月、波多野賢一「医学館補遺」）によって見れば、諸医師からの寄付策をうち出したのは、田沼意次のようにとれる。

（5）たび重なる触にもかかわらず、安永・天明にかけて次第に寄付金が減少し、躋寿館が慢性的な財政危機にあったことは、『教令類纂』所収の文書に見えている。

（6）「医心方といふ書は、日本の古医書にして、唯一部古来より半井大和守が家に伝ふる外、絶て無き古典なるは、世間に知る所なれば、医学館に壱部を写し留んと謀り、其趣を多紀桂山より同家へ掛合たるに、荆州を借るの詐術なりとでも誤解せしや、紛失せり、と答へて出さず、然るに其所蔵なるは紛れもなき事故、医学館より官に請ひ、官より同家へ説諭ありしか共、同家にては猶ほ秘して、紛失とのみ云張りたれば（以下略）」（喜多村栲窓『五月雨草紙』、新燕石十種・第三巻所収）。

（7）藤波剛一「江戸幕府医官制度」（『日本医史学雑誌』一三〇〇号、昭和十七年）。

（8）『多紀氏の事蹟』第一章第二節「附　半井、今大路両氏に就いて」。

（9）寛政元年二月の通達（『日本教育史資料』第七冊、六三九頁）、および四月の通達（『徳川禁令考』二、二五〇～二五一頁）。

（10）医学館での考試記録は、官立化当初の『寛政甲寅（六年）考試口問主意書』『寛政甲寅考試問答一件調書』『寛政甲寅考試医案方附留記』（京都大学医学部図書館所蔵・富士川游旧蔵書）が知られるのみである。ほかに文久以降になって昌平黌における考試にならって、五年に一度行われる大試と、春秋ごとの小試からなる試験制度が整えられたというが、実施されたか否かは未詳であり、資料も見出し得ていない。

（11）東京大学史料編纂所所蔵。句読点・濁点を補った。

（12）京都大学医学部図書館所蔵・富士川游旧蔵書。同書には版行前の多紀棠辺による草稿に海保漁村が筆刪を加えた「医庠房舎学規」が合綴されている。共に森枳園の旧蔵にかかる。句読点・濁点を補った。

（13）北里研究所東洋医学総合研究所所蔵。

（14）大田錦城撰「図南山田君墓碣銘」に、「初受素難加藤俊丈」とみえている。

（15）「右御不快（一橋治済の病気か）ニ付、御医師共医案を書上候様被仰出候ニ付、銘々存寄を認めさし上候由。然る所いづれも漢文ニて認候由。中ニハ漢文出来不申者も御座候ニ付、心易儒者抔へ是ハ顚倒は有まいか、ちと直して下され抔とたのミ候者も御ざ候由。医案より漢文を案じ候事専一ニ相成候由。是ハべら坊成事、やっぱり左様被存候の、か様仕候方宜候抔と、俗文ニ認差出候が手短ニて誰にも分り可申候に、六ケ敷書立てハ西下や大手抔ハ御分りなさろふが、其以下でハさっパリ分らぬ事、思ふ様ニもかゝれぬ事だにとさた仕候由。併漢文認候ハ安元（多紀桂山）好ニて御ざ候ニ付、漢文ニ認め

不申時ハ文盲ニも聞へ候ニ付、無理ニ取拵へ漢文ニ認候間、医案よりハ漢案ニ困り候由。」（『よしの冊子』第一一五回呈覧、中央公論社『随筆百花苑』第九巻、二二〇頁。拙稿「『よしの冊子』医家関連記事（二）」本誌第四五巻第一号一二一頁。）

(16) 「其後御医師之方最早居り合候に付、陪臣町医師共も出席為仕候ても可然哉之旨、同八寅年十一月永寿院申上候処、先是迄之通暫見合候様被仰渡候旨に御座候得共、其身之修行にも難相成筋に奉存候得共、先達て町医師目黒道琢会読講釈等罷出候に見合候得は、艮悦儀も（以下略）」（「幕府医学館秘要録」、『医談』七八、明治三五年一二月）。

(17) 田中佩刀「補正・佐藤一斎先生年譜」（『明治大学教養論集』九九、一九七六年）。

(18) 『懐堂全集』（崇文叢書所収）に「与樗園先生書」が収められている。

(19) 森枳園著『枳園随筆』（青裳堂書店、書誌学月報別冊5、一九九七年一〇月）に、「人トナリ豪邁英才ニシテ、文学及フ者ナシ、詩作文章草稿ナシ、筆ヲ下セハ文ヲ為ス、其作人意ノ表ニ出ツ」と樗園を評している。

(20) 『狩谷棭斎』（吉川弘文館「人物叢書」、一九九四年）。

(21) 森枳園自筆「書本草経攷注後」（武田科学振興財団杏雨書屋所蔵、オリエント出版社版『本草経攷注』附載）によれば、枳園と棭斎の初めての出会いは、文政五年八月一日の伊沢蘭軒の酌源堂での定例会においてである。この時、棭斎より「子若読書、則宜明小学。小学不明、則読書無益」と小学の重要さを諭されたという。蘭軒の没後（文政一二）は、主として棭斎に就いて月に三度のペースで小学に研鑽したもようである（『枳園随筆』、十八「狩谷棭斎ノ雑話」）。

(22) 川瀬一馬『日本書誌学之研究』（講談社、一九七一年）「御目見医師講義聴聞躋寿館出席留」。

(23) 橋本昭彦『江戸幕府試験制度史の研究』（風間書房、一九九三年）によれば、天保の改革期に、寛政の改革期に創始された初学者試験の「素読吟味」と次段階の「学問吟味」の接続がうまく機能しておらず、幕臣の修学が「素読吟味」及第に止まっていたため、改善策として天保十三年より春秋両度の試業が実施されたという。

(24) 浅田宗伯が撰文した喜多村栲窓の伝「竜尾先生伝」（東京大学総合図書館・鶚軒文庫所蔵『皇朝医叢続篇』所収）に幕末当時盛行の洋学を批判した栲窓の見解を次のように言っている。「其（洋学）為医道之蟊賊、尤更甚焉。而人之篤信、不已者何也。蓋以漢家之学、日就榛蕪、医聖之教、無門可入。彼視為迂僻、為芻狗、而我不能以禁之也」。

（北里研究所附属東洋医学総合研究所医史学研究部）

The Development of Scholarship in the *Igakkan* (1):

The Founding of the *Igakkan*

by Senjurô MACHI

The *Igakkan* 医学館 was an institute for medical education in Tokugawa Japan, which was founded by Taki Mototaka 多紀元孝 (1693-1766) in 1765 and became a bakufu institution in 1791. This paper looks at the latter process (for the purpose of this abstract, I will refer to this as bureaucratization) in the context of Tokugawa educational policy, particularly in comparison with *Shôheikô* 昌平黌, a school for training bureaucrats. Also, this paper examines sources written during the Kansei 寛政 period (1789-1801), many of which have been neglected in the field. I show that the Kansei reforms significantly shaped medical thought in the late Tokugawa period. The paper is divided into three part, and will be published in this and the two forthcoming issues. The titles of the three parts are as follows:

Part 1. The Founding of the *Igakkan*

Part 2. Government Doctors during the Kansei Reform Period, As Seen in *Yoshino zôshi* よしの冊子

Part 3. The Place of Evidential Scholarship in the late Tokugawa Period.

In Part 1, I show that while the *Shoheikô* confirmed *Shushigaku* 朱子学 (sometimes referred to as Neo-Confucianism) as an orthodoxy, supporting the existing political structure, the scholars in the *Igakkan*

were never confined by *Shushigaku*. The institute provided a new intellectual atmosphere in which syncretism (*settchûgaku* 折衷学) and evidential scholarship (*kôshôgaku* 考証学) were developed. (The Part 1 comprises the following sections:

1. On the Bureaucratization of Educational Institutions
2. The Background of the Founding of the *Seijukan* 躋寿館, predecessor institution of the Igakkan
3. The Significance of the Bureaucratization of the *Seijukan*
4. The *Shoheikô and the Igakkan*
5. The Formation of the Academic Lineage of the *Igakkan*)